



美しく、滲む。

水のメディウム

透明水彩にメディウムを使うと、表現の幅が一気に広がる。たとえば、オックスゴール。絵具に数滴加えて、水を含ませた紙にひと塗りすると現れる、絶妙な滲み。水だけではできなかった美しい滲みとぼかしの技法を、そのときあなたは手に入れるのだ。他にも、絵具を自作したり、タッチを変えたり、マスキングをしたり、白抜きをしたり。新しいテクニックが、新しい作風を生み出して、やがて水彩の世界を大きく拡げていくことを体感してほしい。お近くの画材店へどうぞ。〈ホルベイン水彩用メディウムシリーズ〉



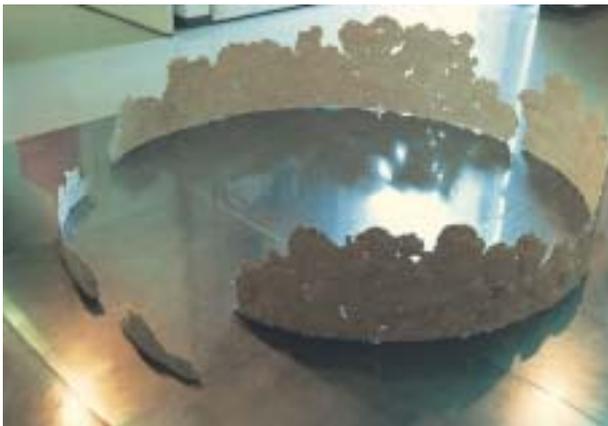
holbein

holbein

## 西山美なこ



1988年、京都・東山のアートスペース虹で初個展。「自分の部屋のベッド周辺で生まれてくる物たちをギャラリーに持っていくことが、自分にとってリアルだと感じたんです」



地の、音の、とどろく…  
1988 繊維版、鉄板  
50×270×270cm

外界と内界の間を見つめて  
中井康之 文 森田兼次 写真\*

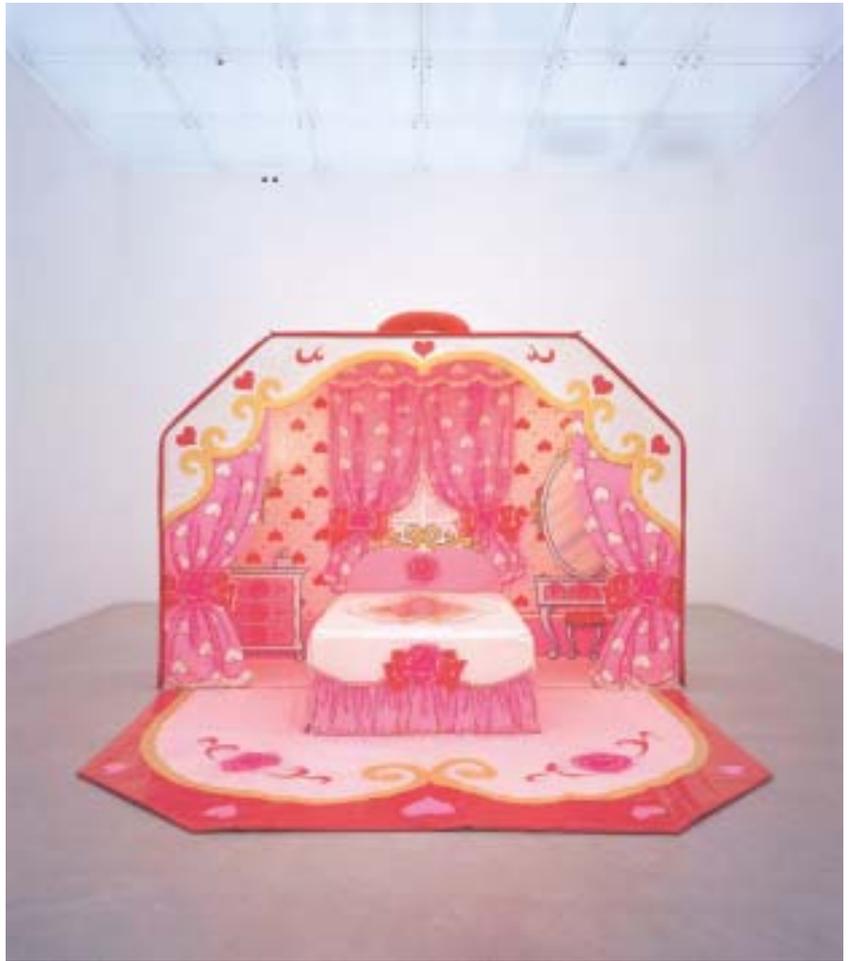
1988

「展示スペースに作品を設置することに距離を感じながら、インスタレーションについていろいろ考えていました」

冒頭から個人的な話だが、西山との付き合いは長い。筆者が美術史学の学徒だった頃、彼女は京都市立芸術大学の構内で、ゲリラ的に作品を置いたり、油画科の卒業制作でピンク色の巨大な立体物を発表したり、あるいは彫刻科に転科した大学院一回生のときには、花柄模様で埋まった書き割り状の巨大な平面作品を発表したりと、まったくもって諧謔精神に溢れた作家像をリアルに見せてくれた。その後、勤めていた美術館で西山の個展も開催しているが、企画者としての未熟さゆえにその展覧会で実現できなかったさまざまなことがあり、それが胸の奥に突き刺さったまま月日が過ぎて今日に至っている。彼女と正面から向き合うのは、ほぼ10年振りになる。あらためて西山が美術の世界に入るきっかけを聞いた。

「そう、思い出しました。父が持っていた本で、講談社『現代の美術』シリーズ(1971・72年)というのがあったんです。田舎なので、気軽に

ザ・ピンクハウス 1991 (93年に再制作) アクリル、ビニル布、鉄、ウレタンマットほか 310×400×370cm  
 撮影=末正真礼生 写真提供=金沢21世紀美術館(今年、同館で行ったワークショップに出品された際に撮影)



## 1991

「この頃、ずいぶん多くの要素が入り込みました。装飾への関心、女性の着飾る願望、男性側の女性に対する欲望……」

「展覧会を見に行ける状況じゃなく、高校のときはそれらをよくペラペラめくっていました。とくにそのなかの『主張するオブジェ』第6巻、東野芳明編)に収録されているクレス・オルデンバーグが好きで、オブジェを扱ったその巻を、このシリーズのなかでも一生懸命読んでいました。あとは『集合の魔術』第7巻、高階秀爾編)とか。ラウシェンバーグやロバート・マザウエル、ペインタリーなアメリカ美術に関心がありました。」

京都芸大の油画科に入学、二回生から三回生の間に1年間休学して、アメリカ、ジョージア州の陶芸家の家に私費留学する。ニューヨークの現代美術を見ることもできたはずだが、なぜジョージアだったのか。アメリカに渡った理由をあらためて尋ねると、意外な答えが返ってきた。

「留学した本当の理由は、ある考えを確かめたい気持ちがあったからです。それは、言葉や文化の違いを越えた人の基本的な関係、たとえば親子の愛などは、きつと言葉が変わっても同じに違いない、そのことを確

かめたかったんです」。さらに西山は、このような人間のあり方を探求する態度にこそ、美術を行う原点がある」と断言した。

京都芸大に戻り、ゲリラ的に構内各所にインスタレーションするような行為を始める。そのような、瞬間を捉える作品を考えるきっかけとなったのは、当時講師を務めていた元永定正の強烈なメッセージの影響もあった。「ここは展示スペースだと意識して作品を設置すること、みずから光がきれいと感じながら制作室でいじっていることが、なにか違うんですね。そのような距離を感じつつ、インスタレーションという行為に対して常にいろいろ考えてい



Sugar Crown 1999 砂糖、卵白 10.7×14×14cm 撮影=吉成行夫



Pink Vacancy 2004  
(銀座・資生堂ギャラリー  
での展示風景)  
撮影=金澤正人 写真提  
供=資生堂企業文化部

## 2004 「外界として気になる部分とやり取りしてきました。 いまもそういう姿勢は変わらないと思います」

ました。おそらく自分がきれいだと  
思うものが本場で、『展示』を行うと  
違ったことになるんですね」。

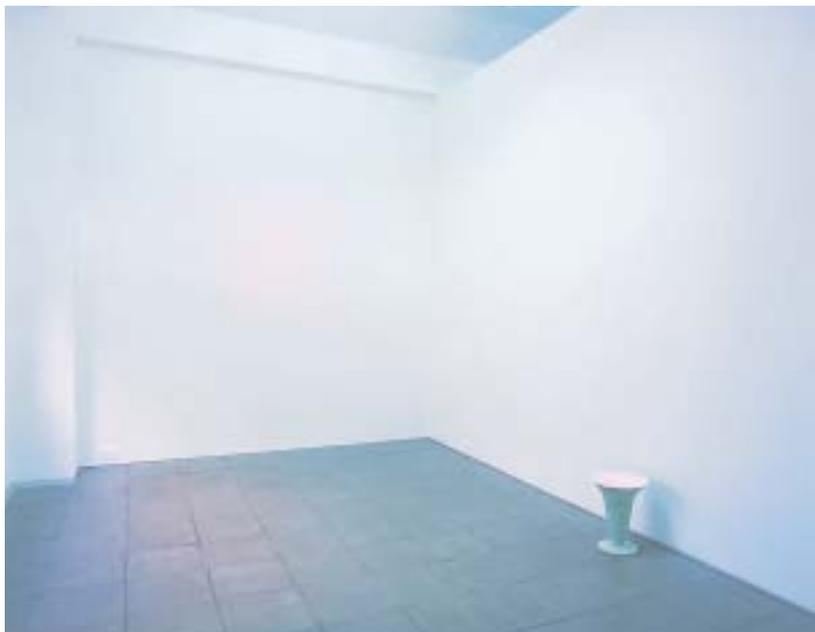
初めての個展は1988年、四回  
生のときだった。最初はそれまでや  
ってきたような紙繊維の立体作品  
をインスタレーションするつもりで  
考えていたが、大きな意識の変化が  
あり、自分の生活空間を画廊に持ち  
込んだ作品となった。『詩』になりき  
っていない言葉『そのもののほうが  
生でリアルではないか、スケッチその  
もののほうがリアルではないかと思  
うようになってきたんです。それで、  
ベッド周りの物をそのまま持ち込ん  
で、生み出されたような状態で見せ  
ることにしました。ベッドの上には、  
紙繊維で器のようなかたちを作り、  
自分の心の受信機として、そこに  
残したんです」。

その後、西山は「かわいい」という  
言葉で形容できるような、ある具体  
的なオブジェ的なものを作るように  
変化していったかに見える。が、今  
回のインタビューで、実はそうでは  
ない、と語った。

「キューピッドを用いた作品などは、デ  
ュシャンの考え方に助けられたもの  
だと思っています。デュシャンより前の  
行為を行っても仕方がないという意  
識が生まれ始めていました。既成の  
ものを持ち込むという行為で、じ  
ゆうぶん作品が成立するんだとい  
う意識がはつきりありました」。

大学院終了時に発表した『ザ・ピ  
ンクはうす』。リカちゃんハウスから  
抜け出てきたような、西山スタイル  
と言ってもいい作品だ。この大きな  
変化の背景には、自身の女性性への  
直面があったようだ。「中学、高校ま  
では女の子らしくすることにと  
抵抗感を持っていました。大学に入  
り、自分自身と向き合うようになっ  
て、どうしても自分のなかの女性  
性を認めないわけにはいかなくな  
ってきたんです。なぜ女性性は化粧  
をするのか、なぜ着飾るのか、その  
頃に宝塚歌劇の『ベルサイユのばら』  
を見たのが、より一層強烈に自分の  
なかで問題化していったんですね。  
色彩とか装飾とか、そこまでやる世  
界があったのかということですね」。

個展「i-ro-i-ki」(8月26日—10月7日)。会場の児玉画廊にて。白いギャラリーの壁がほんのりと彩られ、見る者を引き込む(上)。あるいは裏面がピンクに塗られたオブジェが壁面に張られると、壁自体が淡く彩られたように見える(下)\*



にしやま・みなこ 1965年兵庫生まれ。91年京都市立芸術大学大学院美術研究科彫刻専攻終了。主な個展に93年大阪インターフォームコンテンポラリー、97年「ピンク♥ピンク♥びんく」(西宮市大谷記念美術館、兵庫)、99年ギャラリーシマダほか。グループ展では97年「デ・ジェンダリズム—回帰する身体」(世田谷美術館、東京)、2000年「Let's Entertain」(ウォーカー・アート・センター[米]、ポンピドゥー・センター[仏]ほか国際巡回)、01年「垂細垂散—CUTE」(水戸芸術館現代美術ギャラリー、茨城)、04年「夢見るタカラヅカ展」(サントリーミュージアム[天保山]、東京オペラシティアートギャラリーほか)、「Pink Vacancy 西山美なコ ライブ・ドローイング」(資生堂ギャラリー、東京)、05年「AniMate。アニメイト。展」(福岡アジア美術館)ほか。

この後、西山の作品の軸がはっきりとする。ピンクに代表されるような女性性にウェイトを置くが、それに付随して装飾や着飾ることへの関心や願望、さらにセックス産業に見られるような、男性から見た女性への欲望の色彩的なビジュアルにまで視野が広がって、西山の世界は確立したと云っていいだろう。しかし、

このような展開も戦略的に考えた結果ではないという。ある個人の外界と内界とのやり取りで作品ができてくると思うんです。ほうっておけないこと、つまりその外界がキャンバスや絵具の場合もあれば、現象の場合もある。私はただ、街なかに溢れている外界に反応しただけなんです。

過剰でキッチュな作品群とは異なる系譜として、シュガー・クラフトによるハイヒール・シューズやティアラを造形した作品、近年のウォール・ペインティングなど、どちらかというところ純粋な美術の問題を思考しているようにも見える作品がある。「外界として気になる部分とやり取りしていたことに変わりはありません。いまもそういう姿勢です。より本質的なものを掴みたいという欲求は以前より強くなつた気がするのですが、たぶん過剰な作品も並行して出てくるのではないかと思います」。

古典的な考え方によるならば、作者の思想は作品自体にある、ということになるだろうが、現在の美術作品や作家にそれは通用しない。時間を経て、自分自身を省みる姿勢が扉を開いたのであるうか、以前は見えてこなかった西山作品の重要な局面が、次々と現われ出したことに、インタビュアーとして大きな喜びを感じた。

◎なかい・やすゆき 国立国際美術館学芸員  
9月30日、個展開催中の大阪 児玉画廊にて  
取材